

2018. 5. 24 会報 NO101	バスツアー 淡路・阿波路に古代文化を訪ねる旅	東大阪文化財を学ぶ会 会長 南 光弘 (担当)
-------------------------	---	-------------------------------

実施日 6月9日(土) 雨天決行

1. 集合場所 旧市民会館前 何かあれば南携帯 090-83759655
2. 集合時刻 午前7時30分(出発時刻です) 解散は午後7時を予定
3. 費用 7000円(バス代、玉青館入館料、保険代など)
4. 案内解説 清水 守民さん、文化財を学ぶ会メンバー、県立埋蔵文化財総合センター学芸員さん
5. 昼食 お弁当を持参ください。
6. 参加 大型バスを予定しています。どなたも参加できます。是非とも、多数のご参加をお願いします。参加される方は、同封の葉書か、または、ホームページのEメールにて、出来るだけ早く参加申し込みをして下さい。26日の古代史講座当日、申し込まれても結構です。
 なお、直前の参加希望者への確認は事務局からは致しません。変更などがありましたら、早急に事務局(06-6777-2137)にご連絡をお願いします。

7. 行程

東大阪→明石大橋→五斗長垣内遺跡(ごっさかいと、北淡町)→淡路国一之宮・伊弉諾神宮→滝川記念美術館(玉青館・松帆銅鐸資料展示、南淡路市)→鳴門大橋→鳴門IC→萩原2号墳、宝幢寺古墳→阿波国一之宮・大麻比古神社、ドイツ橋→徳島県立埋蔵文化財総合センター→藍住町・藍の館→阿波史跡公園内、八倉比売神社→宮谷古墳(3世紀の前方後円墳)→淡路サービスエリア「オアシス」→東大阪へ

※昼食は、持参の弁当を車中か、屋外でとります。

※行程は、日程の都合上変更させていただくこともあります。ご了承下さい。

《淡路の由来》

淡路は、『古事記』に、稲が良く実豊かな島、淡道之穂之狭別島(あわじのほのさわけのしま)」と表記されている。阿波国は『古事記』に「栗国」と表記されていることから、「淡路」は本州から阿波へ行く通路を意味していると考えられる。実際、畿内・紀伊・淡路・阿波・讃岐・伊予。土佐へとつなぐ海と山の路は南海道と名付けられていた。また、「神代記」には「淡路島を胞とす」とあり、「胞」は胎児の通る産道とみる意味づける考えもある。

《いわゆる「国生み神話」とは》

国生み神話では、「遠い遠い神代の昔…。まだ世界には形がなかった頃…。国土創世の為、天より遣わされた伊弉諾尊(いざなぎのみこと)・伊弉冉尊(いざなみのみこと)の二柱の神は、どろどろの世界を凝り固める為、『天の沼矛(あめのぬぼこ)』で大海原をかきまわした。すると、その矛より滴る雫が、自ずと凝り固まって島となったという。「自凝島(おのころじま)」である。二柱の神はこの島に天下り、そこで夫婦の契りを結び、国生みの儀式を執り行った。そして二柱は次々と島をお生みになり、やがて誕生したのが「大八嶋(おおやしま)の国・日本」である」という。

この「国生み神話」は、松前健博士や岡田精司教授ら歴史学者や神話学者の研究によれば、「淡路の海人族が伝えた『島生み神話』であったといわれている。それは、淡路が大和朝廷の御饌都国(みけつくく)として深くかわりのある中で、食料貢献に際して淡路の『島生み神話』が宮廷に入り、それが『記・紀』編纂の時期(奈良時代)に、壮大な「国生み神話」となって語られたのであろうといわれている。淡路に屯倉がおかれ、海人が朝廷に出仕するようになり、淡路の神話が宮廷に伝えられたのである。伊弉諾・伊弉冉が天照大神を生んだという伝えは、それ以後に付加されたものと解される。」という。

ア 自凝島は淡路に4ヶ所の伝承地。(沼島、岩屋漁港にある絵島、洲本の成ヶ島、自凝島神社)

*何れも、上から見ると「勾玉」に近い形。生まれる前の胎児の姿

イ 国生み神話のルーツは、中国の江南地方 ー海人族の神話、島生み神話

淡路の穂の狭別の島（淡路島）②伊予の二名の嶋（四国）③隠岐嶋④筑の嶋（九州）⑤壱岐の島⑥津島（対馬）⑦佐度島⑧大倭豊秋津島（おおやまとあきつしま本州）を生み、これを「大八嶋国」といった。

ウ 海人族、漁撈民文化（「山幸、海幸物語」）は、「入れ墨」、「断髪」、「マゲ結い」から、越や江南部の暖流漁撈民の文化といえる。海人族には「阿曇系」（網漁を主とする）と潜水漁法を得意とした隼人族の二種がある。淡路島には、明石海峡周辺（淡路島北部）を支配していた野島海人族と、鳴門海峡周辺（淡路南部）を支配していた御原海人族がいた。また、阿万の海人族は、日本一潮の流れの速い鳴門海で生活していたため、航海術にすぐれていたといわれている。

最近、発掘された舟木遺跡からは海人族が、塩づくり、土器作り、漁労だけでなく、鉄器の生産と流通のネットワークの担い手であったと考えられている。

① 明石海峡大橋ー世界最長の大橋ー

「夢のかけ橋」といわれた明石海峡大橋が架けられる機運が高まったのは、1955年（昭和30）5月11日午前7時に起こった「紫雲丸事故」。1480トンの紫雲丸が衝突沈没し修学旅行中の児童など死者168名の大惨事であった。

明石海峡に架かる、着工は1986年、総工費5000億円。1998年4月5日に開通して20年が経過した。橋の長さ3,911m、中央2本の主塔間の距離1,991m（建設当時は1m短かった、1995.1.17阪神淡路大震災で長くなる）、主塔の高さ298.3m。マグニチュード8.5クラス、秒速80mの暴風にも耐えられるように施行されている。世界に誇る技術の結晶といえる作品である。

② 国内最大規模の鉄器工房跡、史跡五斗長垣内遺跡

海岸から3km、標高200mの丘陵上の鍛冶工房跡、「垣内遺跡」で弥生時代後期（西暦50～220年ごろ）の大型鉄製品が出土した。

遺跡の範囲は、東西約500m、南北50mに広がる。現地からの眺望は、播磨灘や瀬戸内海を行き交う船を一望できる。

発掘調査では、竪穴建物跡23棟見つかри、そのうち、床面の土が強い熱で赤く焼けた炉跡のある建物が12棟もあった。鍛冶作業（鉄器づくり）として使った同時期の鍛冶工房跡としては全国で最大規模という。日本列島で政治の中心が九州北部から近畿へ移る時期とも重なっており、今後とも、遺跡の性格が大きな注目を集めそうだ。

鍛冶作業の痕跡を残す竪穴建物跡は、遺跡の全域に広がっている。これらの建物は少しずつ時期を違えながら、百数十年間にわたり、一定のエリアの中で営まれ続けられ、その間、鉄器生産が続けられたものと考えられる。

鍛冶を行った建物は、床面に高温の熱を受けた炉跡があり、規模の大きなものが多く、最大のものは直径が10mを超えている。平面形は円形が大半だが、中には方形や長方形の建物跡も見つかっている。最大規模の円形建物には、壁際に掘られた溝や柱穴が3重に巡ることから、少なくとも2回の建て直しが行われたことがわかる。最初、直径が7.5mで6本柱であったものが直径8.8mで8本柱へ、さらに直径が10.5mで10本柱の巨大な建物へと建て替えられたものとみられ、次第に規模が拡大していった様子がうかがえる。床面の中央付近に10基の炉跡があり、台石も残されていた。昨年、最大級の建物「ごっさ鉄器工房」として、復元された。

建物跡からは鉄鋌（てつてい）、鉄板の裁断片など鉄製品45点をはじめ、石鎚31点、鉄床（かなとこ）石などの鍛冶道具も見つかっている。板状鉄斧・大型鉄製品（長さ20cm、幅5cm、厚さ3cm、重さ564

g) は同遺跡東端の竪穴建物跡（直径 9.7m）で出土した。弥生時代後期の鉄器とみられ、全体がさびており、朝鮮半島か中国から持ち込まれたものと考えられる。

村上恭通・東アジア古代鉄文化研究センター長（愛媛大教授）は「鍛冶遺構がこれほど密集している例は他にない。弥生時代の鍛冶の実態が分かる最東端の資料」と、している。

＜舟木遺跡＞

五斗長垣内遺跡の北方にある舟木遺跡は2、3年前から発掘調査されている。丘陵の尾根中央の尾根エリアでは、鍛冶工房を含む3棟の建物と尾根頂上部で大型の竪穴建物跡1棟を発見されている。一方、南尾根エリアでは、遺構や遺物が希薄な頂上の平坦部を取り巻くように、3方向の斜面で完形品を含む大量の土器や鉄器が発見された。いずれも、弥生時代後期後半から終末期（2世紀後半～3世紀前葉）にかけての遺構・遺物という。弥生時代のものとしては、北部九州や山陰地域での出土例はあるものの、その数は極めて少なく、近畿では初めての全長16.5cm最大巾1.4cm鉄製ヤスと鉄製釣針が出土している。

鉄製漁具の出土は、山上に広がる遺跡が、海との深い関わりをもっていることを物語るものであり、鉄器生産の背景にある広範なネットワークを有する海の民との深い関わりを想定させており興味深い。

③ 幽宮、淡路国一之宮・伊弉諾神宮

天ノ浮橋に立ち矛を底つ下にさし降ろし、大八嶋（日本の国土）創世したという伊弉諾・伊弉冉両神を祀る。延喜式神名帳（えんぎしき じんみょうちょう・927年（延長5）では、名神大社であり淡路国一之宮、三代実録には神格一品、明治になり元官幣大社となっている。1954年より『神宮号』をうける。

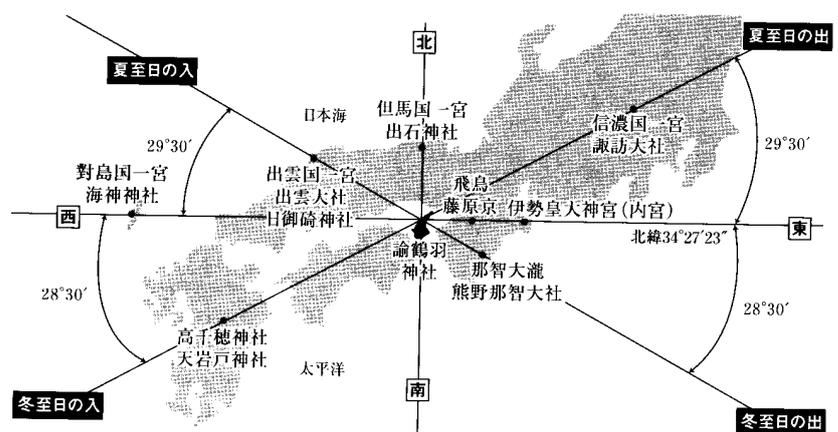
社伝によると、「伊弉諾神宮は、古事記・日本書紀の冒頭にその創祀を記し、神代の昔に伊弉諾大神が、御子神の天照大神に統合の権限を委ね、淡路の多賀の地に『幽宮（かくりのみや）』を構えて余生を過ごされた神宅（かむやけ）の旧跡と伝えられております。ここで終焉を迎えた伊弉諾大神は、その宮居の敷地に神陵を築いて祭られました。これを創祀の起源とする最古の神社が伊弉諾神宮です。明治以前は、神陵の前方に本殿がありましたが、明治12年の国費により造営で、神陵の墳丘を整地して本殿を真上に移築し、現在の景観に整へました。また、地元では日本第一の宮であることから『いっくさん』とも呼ばれます。また日之少宮（ひのわかみや）、一宮皇大神とも別称されております。」とある。

日之少宮（ひのわかみや）とは、夕日を表現する尊称とされている。天照大神の差し昇る朝日の姿に対比することができる。

太陽信仰では昇る方向も沈む方向も清浄という所から、太陽を祭祀するのが女で、陰（水）によって陽（男）が清められるという形をとる。有名な仁徳紀にある高石の富木（とのき）の高樹伝説では、巨木を切って「大御水」を淡路までもらいにいく船をつくる話があり、「安寧記」「反正前記」でも淡路の“瑞井”（ずい）の水で皇太子の体を洗う話がある。太陽信仰に根ざす水の信仰でもある。

右の図は、伊弉諾神宮が北緯34度27分23秒にあり真東に伊勢神宮

（内宮）があり、真西に海神（わたつみ）神社があることを示している。春分秋分の日と同緯度上の伊勢から昇り、対馬の海神神社に沈むことを示している。冬至の日、夏至の日の図のような日の出、日の入り



伊弉諾神宮を中心とした太陽の運行図

を迎えるという。また、真南には、山上に伊弉諾・伊弉冉両神を祀る諭鶴羽（ゆづるは）神社が鎮座する淡路最高峰の諭鶴羽山（608m）がありその眼下3km先太平洋に、自凝島の有力な比定地「沼島」が浮かんでいる。

また、淡路伊弉諾神宮を中心に、円を画くと不思議なことにその円周上近くに“熊野”地名が存在する。

日本書紀では、熊野は伊弉諾尊の葬られた土地として登場する。また、少彦名命が熊野の御崎から常世（とこよ。海底他界）に渡った、との記述もあり、熊野の名は記されていないものの、素戔嗚尊が、八岐大蛇を退治された後に紀伊国に渡り、「吾が心すがすがし」と申されて宮殿を営まれた処を「須賀」と記し、また「熊成峯に居し」とあり、熊成峰から根の国（地下他界）に入った、との記述もある。

《本殿》

本殿の形式は、三間社流れ造向拝付で、屋根の桧皮葺き（ひわだふき）は前方の幣殿と連結して、一屋根にみせている。本殿大床下には、神陵に築かれていた数10個の聖なる石が格納されているそうだ。本殿の右側に幹回り8mの夫婦クスノキ（国天然記念物）がある。

④ 滝川記念美術館（玉青館・松帆銅鐸資料展示、南淡路市）

滝川記念美術館は、日本南画界の第一人者、直原玉青（1904～2005）の絵画及び書の作品をコレクションの核とする現代南画の美術館。美術館建設に当たっては、南あわじ市在住の医師で、直原作品のコレクターである滝川弘氏が建設費用の全額を寄附し1991年にオープンしている。

絵画・書をはじめ、直原玉青に関する資料約470点の大部分は本人からの寄贈で、このほか当館にゆかりのある作家たちの洋画・日本画・書・陶芸作品などを所蔵している。1階展示室は直原の代表作『禅の牧牛うしかひ草』（全12図）を常設展示している。

ところで、2015年4月、「淡路出土の銅鐸—淡路島7個発見 海岸近くで採取の砂山」と大きく報道されたことを受けて、松帆銅鐸の展示を玉青館で引き受けることになった。新聞報道では、次のように書かれていた。

「弥生時代中期（紀元前2世紀頃）の銅鐸7個が、兵庫県南あわじ市で見つかり、県教委と市教委が5月19日、発表した。海岸近くの松帆地区から採取された砂の山から見つかり、「松帆銅鐸」と名付けられた。出土数では、最多の島根県雲南市・加茂岩倉遺跡（39個）などに次ぐ4番目となり、一度に大量に埋められた最古のケースとなる。専門家は「初期の銅鐸祭祀の解明につながる国宝級の資料」と評価している。県教委などによると、兵庫県内で出土した銅鐸はこれで68個（記録のみ含む）になり、都道府県別出土数で最多。このうち淡路島は21個に上る。同じ松帆地区では、江戸時代前期の1686年に8個が出土した記録があり、うち1個が伝わる。

なお、今回発掘の松帆1号銅鐸は、菱環紐（りょうかんちゅう）2式で横帯文。2～7号銅鐸は外縁付紐1式で4区袈裟棒文（けさたすきもん）。

難波洋三・奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長の話「数十年に一度の大発見。舌を伴うことや製作時期の古さ、海に近い出土地などから、謎が多い銅鐸の機能や生産、流通、祭祀を巡る研究が進展するだろう」と、語る。」と報道された。

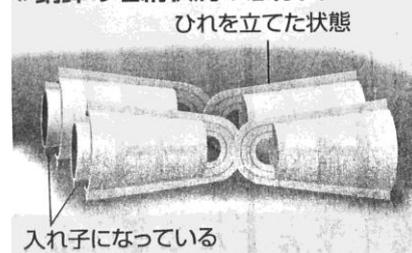
では、何時、なぜ埋めたのかは、現在に至ってもまだまだ謎である。

松帆銅鐸の内部に付いていた植物8点（樹皮・イネ科・ススキ麗の葉・被子植物）の放射性炭素年代測定法によって、BC4世紀～BC2世紀（約2400～2200年前）に埋められたことが分かってきた。

淡路島での銅鐸出土地



銅鐸の埋納状況の想像図



これまでは弥生時代中期末（1世紀前後）と後期末（3世紀前後）の2回に、一斉に銅鐸は埋められたと考えられてきたが、それより前にも埋められていたことで、このとき弥生社会では何か起こったのか、さらなる議論を呼びそうだ。

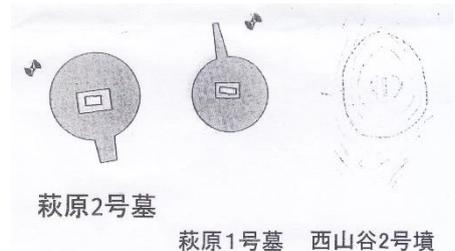


鳴門海峡、鳴門大橋を越えると阿波国に入る。古くから三大暴れ川として知られる、利根川の坂東太郎、筑後川の筑紫次郎とともに、「四国三郎」と呼ばれる大河、吉野川が流れている。その豊かな自然は人々に心のやすらぎを与え続け、過去から現在に至るまで、人々の暮らしに計り知れない影響を及ぼしてきた。

特に、今回訪れる国府町は、古より阿波の中心地として栄えて「阿波のまほろば」ともいわれており、鮎喰（あくい）川沿いには、水銀朱が塗られた縄文土器、土製仮面、弥生時代の大きな97.8cmの銅鐸、八倉比売神社、三角縁神獸鏡3面が出土した宮谷遺跡など多彩な遺跡がある。

⑤ 萩原古墳群（萩原2号墳）、宝憧寺（ほうどうじ）古墳、天河別（あまのかわわけ）神社古墳群

JR池谷駅の北側の尾根上には、東から3つの遺跡が並んでいる。宝憧寺古墳は、全長47mの前方後円墳で、4世紀末に築かれている。天河別神社古墳群は、神社の西側に継続的に築かれた古墳群。最も大きいのは全長41mの前方後円墳の3号墳。古墳群を保存するために尾根にトンネルを掘って道路が通っている。



画文帯同向式神獸鏡が出土した萩原一号墳は現在残っていないが、北側の尾根には1号墳より古い2号墳が見つかった。2号墳の墳形は円丘+突出（積石）で、埋葬施設は積石木槨、箱式石棺が付設。副葬品として漢鏡が出土。日本最古の前方後円墳？で2世紀末と言われている。奈良県のホケノ山古墳の原型といわれ築造が半世紀も古い。

⑦ 阿波国一之宮・大麻（おおあさ）比古神社

祭神は大麻比古大神と猿田彦大神。大麻比古大神とは、阿波国を開拓した阿波の忌部氏（いんべし）の祖神。神武の時代に忌部氏の子孫が阿波国に入り国土を開拓して麻とか楮（かじ）を栽培し麻布とか木綿をつくった。その氏族は麻植（おえ）郡を拠点としていたが、先祖の天日鷲命（あめのひわしのみこと）を祀っているのが徳島市に鎮座する忌部神社。忌部神社の祭神、天日鷲命の先祖、天太玉命（あめのふと

たまのみこと)を祀るのが大麻比古神社と伝えられている。

また、猿田彦大神とは天孫降臨(てんそんこうりん)の際、その道案内の役を務めた神様。大麻比古神社の裏に聳えている大麻山(おおあさやま)の峯に鎮座していたが、大麻比古神社に合わせ祀られるようになったという。祭礼の時、天狗の姿をして神輿(みこし)の先導をしている神様で、災難や禍を祓い退けるといわれている。

高速道路から見える大鳥居は、大麻比古神社の参道(約800m)の入り口に建っており、平成14年に鋼管製で高さは14.6m、柱間11m。境内に一際聳え立つ楠は、樹齢千年余の大麻比古神社のご神木。幹周り8.3m、樹高22m。鳴門市指定の天然記念物。

また、神社周辺には、ドイツ橋がある。第一次世界大戦当時、坂東俘虜収容所で捕虜生活を過ごしたドイツ兵士が、すぐれた母国の土木技術を生かして大麻比古神社境内の丸山公園に造った橋で、日独両国民の友情の架け橋として大きな役割を果たしている。また、めがね橋と呼ばれているミニチュア石橋もドイツ兵士が造った橋として残されている。

⑧ 徳島県立埋蔵文化財総合センター(西山谷2号墳、移設石室) 088-672-4545

徳島県の埋蔵文化財保護の拠点として設置され、常設展示室には県内の遺跡から出土した遺物が約1600点展示されている。移設展示されている西山谷2号墳は、標高74mの尾根上に3世紀半ばに築造され、南北径20m、東西径18m・高さ2mの円墳。中央に南北方向の結晶片岩(青石)石積の竪穴式石室である。竪穴式石室は全長4.72m、北幅1.05m、南幅0.83m。墓壇は南北6.5m、東西4.8mで全体が結晶片岩で覆われている。石室には粘土でつくられた棺台があり、割抜式木棺があったと考えられている。石室の床には水銀朱が塗られていて、特に北側が多量だった。棺内北側から鉄鏃、ヤリガンナ、鉄剣、鉄斧、鉄片、青銅鏡など多くの副葬品が、棺外からは鉄槍や土器が出土した。

⑨ 名神大社、天石門別(あまのいわとのわけ)八倉比賣神社(一説では、阿波国一之宮)

社名の「八倉」の「八」は「多くの」と考えられ、古墳や神の座と解し、多くの神々(墓)を統べる女神と考えられる。実際、八倉比賣神社の神体は杉尾山であるとされているが、この山を含む気延山一帯には約200もの古墳が存在している。実は、八倉比賣神社も古墳の上に建てられており、前方後円墳の前部分に社殿が、そして後ろにあたる円墳部分は奥の院となっている。この奥の院には、一辺約2mの五角形の青石による石積みの祭壇が置かれ、その上には砂岩製の亀石・鶴石の“つるぎ石”が収められた祠がある。

古来、この奥の院の祭壇を拝んでいたが、江戸中期に古墳の一部を削って社殿、拝殿が建てられたという。

祭神は、大日靈尊(おおひるめのみこと)、即ち天照大神である。そしてこの神社の古文書には、伊弉諾、大日靈尊がこの地に鎮座された由来、天照大神の葬儀の様子が記されているという。おそらく八倉比賣とは天照大神の別称ではないかと推察されている。

なお、八倉比賣神社、五角形(ペンタクロス)の青石による石積み祭壇、阿波忌部氏などについては、ペンタクロス研究所の清水 守民さんが詳しく解説する予定。お楽しみに。

⑩ 阿波史跡公園・徳島市立考古資料館 088-637-2526(徳島市国府町西矢野 10-1)

《阿波の古墳群》

- 1 天河別神社古墳群 古墳時代前期～中期に築造された10基以上 萩原墳丘 西暦200年前後
- 2 気延山古墳群 八倉比賣神社、宮谷古墳
- 3 渋野丸山古墳 墳長105m、県内最大規模を誇る前方後円墳
- 4 眉山カントリークラブ内 日本最古の前方後円墳 「八人塚古墳」

《主な特徴》

ア 徳島や香川の古墳のつくられた年代が古いこと。

国内最古の前方後円墳・八人塚古墳、全長60m

石井町の「前山古墳」。3世紀の後半

イ 徳島・香川の古墳の構造が複雑であるということ。

ウ 古墳のサイズが小さいこと。

エ 徳島の青石（緑色結晶片岩）が近畿地方の古墳に使われていたということ。

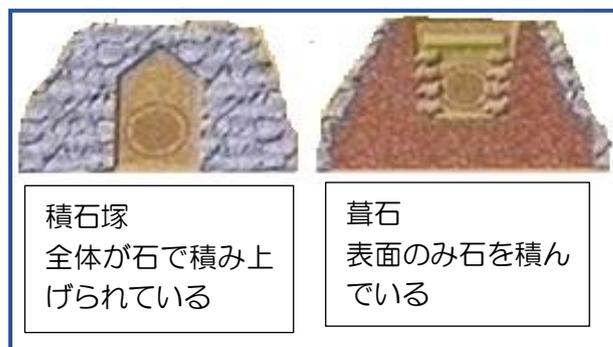
《宮谷古墳 前方後円墳 全長：37.55m》

- ・前方部長：12.55m
- ・後円部径：25m（2段に築かれ、1段目の墳丘面には結晶片岩の割石が積み上げられている）
- ・墓壇：7.5m×4.2m（後円部中央に掘られた穴）
- ・石室：6m×1.2～1.3m（竪穴式石室であり、割竹形木棺を安置した跡が見られる）
- ・被葬者：この地方の指導者の墓と推定されている（東を向いて埋葬されていた）
- ・遺物（石室内）：重圏文鏡、鉄剣、鉄斧、鉄鏃、管玉、ガラス小玉など
- ・遺物（前方部）：三角縁神獸鏡
- ・遺物（周辺部）：多量の壺型土器
- ・築造年代：3世紀後半～4世紀初頭（気延山古墳群で最も古い時期の古墳とされる）

《八人塚古墳 前方後円墳 全長60m》

鮎喰川沿いには古墳が多く存在している。近辺の古墳からは三角縁神獸鏡、銅鐸、銅剣、また鉄器、砂鉄等も出土しており古墳時代の文化の最重要地域といえる。3世紀前期から中期をも含んでいる。

尾根先端。標高100m、造出なし、周濠なし、周庭なし、墳長60m、後円径30m・高4m・頂径約12m、前方幅15m・長30m・高1m、くびれ幅13.5m、後前高差-3m、葺石あり（後円部に積石）。前方部に盛土。（内部主体）：後円部中央か（複数か）、槨は竪穴式石槨か。古墳時代初期の積石塚古墳としては日本最大級の規模。



第11期古代史講座 5月例会のお知らせ

日時 5月26日（土）午後1時30分～4時

場所 大阪商業大学内 谷岡記念館（近鉄小阪駅北東すぐ）

テーマ 藤原氏の豪族支配と天皇利用

講師 いき 一郎（古代史研究家、元沖縄大学文学部教授）

著書『藤原不比等』（三一出版）『扶桑国は関西にあった』（葦書房）

『中国正史の古代日本記録』

参加費 会員 500円、一般参加者1000円（資料代）

どなたでもご参加いただけます。多数のご参加をお願いします。